

絵でよみがえる、瀧神社と龍頭が滝の風景（その 3：森為泰の歌の本から）

前回からの続きです。下の絵には、左右に樹木が描かれています。右側の樹木は、現在は、現地で確認できません。左側の樹木が描かれている辺りには、杉の大木が生えています。この絵に描かれている樹木は、杉だったのかもしれませんが。

さて、『石見国松川小林両家へ送る歌』という文章には、画家である「陶山勝寂（すやま・しょうじゃく）」に、龍頭が滝を写させた、と書かれています。

この「陶山勝寂」ですが、1828（文政 11）年生まれ、1877（明治 10）年没。松江藩のお抱え絵師で、「松江城絵図」などを残しています。号は円々斎。江戸で、絵を学んだということです。高名な和歌の詠み手であり、和歌の先生でもあった為泰ですから、お抱え絵師の勝寂に、簡単に写生を頼むことができたのかもしれませんが。

さて、為泰が伝えてくれたエピソードを基に、少し想像したいと思います。

一点目は、邑智郡中野の小林四郎雅氏へのお礼の絵の題材に、なぜ、龍頭が滝が選ばれたのか。また、18 人の邑智郡の人達が、和歌を作るというので、2 枚の絵を送ったというのですが、なぜ、龍頭が滝が選ばれたのか、という点です。龍頭が滝を選択したのは、送り主であった為泰だったでしょうから、為泰の選択の理由は何か？

理由としては、龍頭が滝の姿がとてもすばらしかったこと。また、滝は、流水が上から落ちてきて、姿が常に変化し、景色に動きがあります。そうすると、詠み手のイメージが膨らみやすくなり、和歌の題材として、適していたのかもしれませんが。そんなことから、為泰は、龍頭が滝をとても気に入っていた、ということが考えられます。

二点目ですが、為泰が、絵を作成して知人に送るということは、この邑智郡のケースだけだったのでしょうか。それとも、他にも、何度もあったことなのでしょう。もしも何度もあったのだとすれば、こんなこともいえます。松江藩のお抱え絵師が描いた、龍頭が滝の絵が送られてくれば、話題になり、たくさんの人が見ようとしたでしょう。また、和歌は、出雲地方でたいへん盛んだったことは、前回紹介しました。歌会の席に、龍頭が滝の絵が送られてきて、その席で披露されると、参加者は、その絵を眺め、和歌を作ったことでしょう。和歌が盛んですから、歌会の回数も参加者も、多かったはず。絵を通して、龍頭が滝に接する人も多かったことでしょう。

江戸時代は SNS もテレビもありませんが、龍頭が滝の名前とその姿は、このような過程を経て、遠方の多くの人々に、拡散され共有されていたのかもしれませんが。

（以下、次回に続く。）

